

# 高機能広汎性発達障害児の自尊感情、自己評価と抑うつ傾向に関する研究

Self-esteem, Self-evaluation and Depression in Children  
with High Functional Pervasive Developmental Disabilities

宮地 健・小島 道生

岐阜県立揖斐特別支援学校・岐阜大学教育学部

MIYACHI Ken and KOJIMA Michio

本研究では、小学4年生から6年生の高機能広汎性発達障害（以下、HFPDD）児20名と対照群として定型発達児146名を対象とし、自尊感情・自己評価尺度及び抑うつ傾向尺度を用いてHFPDD児の自尊感情等の様相について検討した。その結果、HFPDD児と定型発達児で自尊感情の高低に有意差がみられないことが明らかになった。一方で、HFPDD児の抑うつ傾向は、定型発達児と比較して有意に高いという結果となった。しかし、HFPDD児は定型発達児と異なり、自尊感情と抑うつに相関がみられなかった。つまり、HFPDD児においては、自尊感情に抑うつが影響しない可能性が示唆された。また、HFPDD児は、全ての自己評価領域が自尊感情に影響を与えていた定型発達児と異なり、学業、対人関係（友人）、行動・自己表現等複数の自己評価領域が自尊感情に影響を与えていなかった。その一方、HFPDD児は、「個人が重視する自己評価得点」が自尊感情に強く影響していることが明らかとなった。すなわち、HFPDD児にとっては、特に自分にとって重要な領域における自己評価が自尊感情を左右すると考えられる。

**キーワード：**高機能広汎性発達障害、自尊感情、自己評価、抑うつ

## I. 問題と目的

HFPDD児は、対人関係のつまづきから、他者から批判を受けたり、失敗経験を重ねることが多い。そのことは、HFPDD児の自尊感情を低下させることにもつながると予想される。小島・納富（2009）は、高機能自閉症・アスペルガー症候群の保護者20名を対象として、子どもの自尊感情についてアンケート調査を行っている。その結果、「自尊感情が同年齢の子どもたちと比べて、どのような水準か」という問いに対しては、我が子の自尊感情が低い、やや低いと判断した保護者が75%とほとんどであった。自尊感情が低いと判断した理由としては、失敗経験の多さ、友人などからばかにされる経験の蓄積、友人などと比較され他者よりできないことを実感させられる機会の蓄積が挙げられている。また、HFPDD児の自尊感情の低下は、抑うつ症状、不登校などの二次障害を引き起こす可能性がある。そこで、HFPDD児への効果的な支援を実施していくためには、自尊感情に焦点を当てて行くことが重要だと言えよう。

ところで、自尊感情に関する心理学的な研究では、自尊感情は抑うつと強い相関関係にある（杉村, 2005）ことや、自己評価領域に関する重要度が自尊感情に関連していた（Pelham, 1995）ことが明らかになっている。しかし、HFPDD児の自尊感情に関して、これらの心理学的な知見を考慮した研究、さらには児童期のHFPDD児を対象にした研究はほとんど行われていない。そこで本研究は、児童期のHFPDD児の自尊感情の様相を、自己評価及び抑うつとの関連を踏まえながら明らかにし、自尊感情の支援に関する手がかりを得ることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象

本調査は、小学4年生～6年生のHFPDD児23名を対象とした。その内、広汎性発達障害が14名、高機能自閉症が4名、アスペルガー症候群が4名、自閉症が1名であった。23名のうち、通常学級所属は21名、特別支援学級所属は2名である。なお、データに欠損値が認められた3名を除き、男児13名、女児7名の合計20名を分析対象とした。

また、HFPDD児群の比較対照群として、A県A小学校の通常学級に在籍する小学4年生～6年生241名を調査対象とした。そのうち、データに欠損値が認められた95名を除外し、146名(男児69名、女児77名)を分析対象とした。

### 2. 予備調査

予備調査は2012年4月～5月に実施された。質問紙①は、Harter (1985) の子どもの自己認知尺度 (Self-Perception Profile for Children ; 以下SPPC) を参考に、小学4年生～6年生を対象として作成された。教育関係者2名に依頼し、質問紙① (自尊感情と自己評価に関する調査) について小学4～6年生に対する質問項目として、適切であるかどうか内容的妥当性の検討を行った。その結果、質問項目の一部修正が行われた。

### 3. 本調査

調査時期は、2012年10月～11月である。調査は、質問紙①および質問紙② (抑うつ傾向に関する調査) を使用して行われた。

質問紙①は、予備調査の結果を得て作成された。自己評価尺度は、“私は、学校の勉強がよく分かります。” などからなる学業【5項目】，“私は、スポーツのこととなるとあまりうまくできそうにありません。” などからなる運動【4項目】，“私は、自分の身長や体重に満足しています。” などからなる容貌【4項目】，“私は、友達と仲良くつきあえていると思います。” などからなる対人関係 (友人)【4項目】，“学校の先生は私の良さをわかってくれます。” などからなる対人関係 (教師)【2項目】，“私は、家族と話すのが楽しいです。” などからなる対人関係 (家族)【4項目】，“私は、自分の行動に満足しています。” などからなる行動・自己表現【4項目】を含む7領域27項目で構成されている。また、自尊感情尺度は“私は、自分のことが好きです。” などからなる全体的自己感【5項目】で構成されている。

回答は4件法で、各質問項目について、“そう思う” とする回答を4点、“すこしそう思う” とする回答を3点、“あまりそう思わない” とする回答を2点、“そう思わない” とする回答を1点とする形で得点化した。

質問紙②の抑うつ傾向に関する調査では、桜井 (1995) の「子ども用抑うつ傾向測定尺度 (CDI) の日本語版」を活用した。「子ども用抑うつ傾向測定尺度 (CDI) の日本語版」は、全部で27の質問項目から構成されるが、児童の精神的負担等を考慮し、質問項目15問を厳選して作成された。

回答は、3件法で、各質問項目について、抑うつ傾向の高い回答から順に3点、2点、1点とする形で得点化した。

### 4. 分析方法

自尊感情・自己評価得点及び抑うつ傾向得点の高低の比較については、「障害 (HFPDD) の有無」及び「性別」の二要因分散分析を行った。また、各自己評価領域及び抑うつ傾向が自尊感情に与える影響を検討するため、自尊感情得点を平均値によって高群と低群に分け、各自己評価得点及び抑うつ傾向得点についてt検定を行った。

さらに、「個人が重視する自己評価領域」が自尊感情に与える影響を検討するため、各児童が重視する自己評価領域第1位から第3位（質問紙①のフェイスシートによる）の順に、それぞれの領域の得点を3倍、2倍、1倍した得点の合計（「個人が重視する自己評価得点」とする）について、自尊感情の高群と低群でt検定を行った。

### Ⅲ. 結果

#### 1. HFPDD児と定型発達児における自尊感情と自己評価、抑うつ傾向の高低の比較

##### 1) 自尊感情

HFPDD児と定型発達児の自尊感情に関する平均得点は、HFPDD児男子で2.74点（標準偏差0.64）、HFPDD児女子で3.26点（標準偏差；0.57）、定型発達児男子で2.85点（標準偏差；0.62）、定型発達児女子で3.00点（標準偏差；0.61）であった。二要因分散分析の結果、障害の有無の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.22, n.s.$ ）はみられなかったが、性別の主効果は5%水準で有意であった（ $F_{(1,162)} = 4.60, p < .05$ ）。男子が、女子よりも有意に低い評価であった。交互作用（ $F_{(1,162)} = 1.41, n.s.$ ）については、有意でなかった。

##### 2) 自己評価

HFPDD児と定型発達児の自己評価に関する学業、容貌、対人関係（友人）、運動、行動・自己表現、対人関係（教師）、対人関係（家族）の得点結果は、Fig.1の通りである。学業では、二要因分散分析の結果、障害の有無の主効果（ $F_{(1,162)} = 1.48, n.s.$ ）、性別の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.01, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,162)} = 0.56, n.s.$ ）すべて有意ではなかった。容貌では、二要因分散分析の結果、障害の有無の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.22, n.s.$ ）、性別の主効果（ $F_{(1,162)} = 1.22, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,162)} = 0.69, n.s.$ ）すべて有意ではなかった。対人関係（友人）では、二要因分散分析の結果、5%水準で交互作用が有意だった（ $F_{(1,162)} = 4.50, p < .05$ ）。そこで、障害の有無の単純主効果を検定したところ、女子については有意でなかった（ $F_{(1,162)} = 0.29, n.s.$ ）が、男子については5%水準で有意であった（ $F_{(1,162)} = 6.07, p < .05$ ）。HFPDD男子が、定型発達男子よりも有意に低い評価であった。また、性別の単純主効果を検定したところ、定型発達児群については有意でなかったが（ $F_{(1,162)} = 0.00, n.s.$ ）、HFPDD児群では1%水準で有意であった（ $F_{(1,162)} = 9.58, p < .01$ ）。HFPDD男子が、HFPDD女子よりも有意に低い評価であった。運動では、二要因分散分析の結果、性別の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.02, n.s.$ ）は見られなかったが、障害の有無の主効果が1%水準で有意であった（ $F_{(1,162)} = 9.69, p < .01$ ）。HFPDD児が、定型発達児よりも有意に低い評価であった。交互作用については、有意でなかった（ $F_{(1,162)} = 1.54, n.s.$ ）。行動・自己表現では、二要因分散分析の結果、障害の有無の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.00, n.s.$ ）、性別の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.08, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,162)} = 2.68, n.s.$ ）すべて有意ではなかった。対人関係（教師）では、二要因分散分析の結果、障害の有無の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.78, n.s.$ ）、性別の主効果（ $F_{(1,162)} = 0.37, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,162)} = 0.04, n.s.$ ）すべて有意ではなかった。対人関係（家族）では、二要因分散分析の結果、5%水準で交互作用が有意だった（ $F_{(1,162)} = 5.19, p < .05$ ）。障害の有無の単純主効果を検定したところ、女子については有意でなかった（ $F_{(1,162)} = 0.36, n.s.$ ）が、男子は1%水準で有意であった（ $F_{(1,162)} = 14.63, p < .01$ ）。HFPDD男子が、定型発達男子よりも有意に低い評価であった。また、性別の単純主効果を検定したところ、定型発達児群では有意でなかったが（ $F_{(1,162)} = 0.14, n.s.$ ）、HFPDD児群では1%水準で有意であった（ $F_{(1,162)} = 12.96, p < .01$ ）。HFPDD男子が、HFPDD女子よりも有意に低い評価であった。

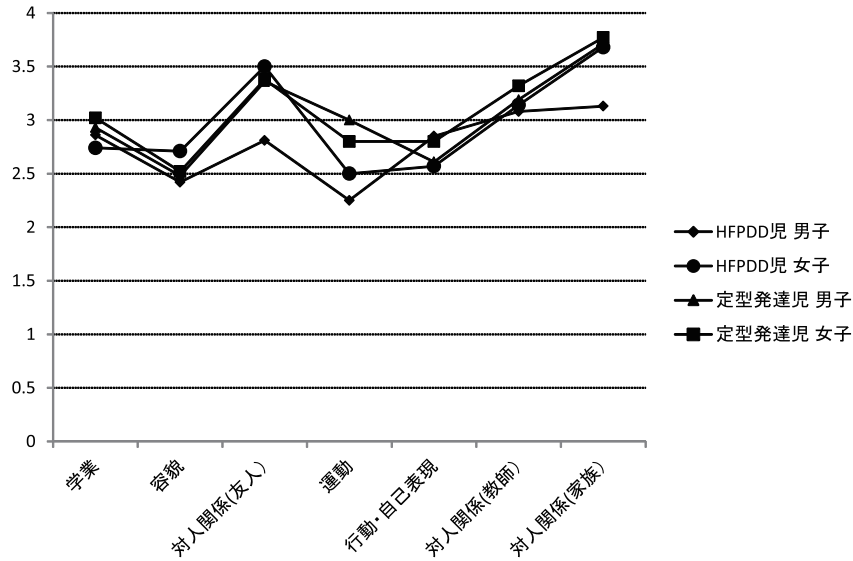


Fig.1 HFPDD児と定型発達児の自己評価に関する平均得点

3) 抑うつ傾向

HFPDD児と定型発達児の抑うつ傾向について、平均得点を算出したところ、HFPDD児男子で32.15点 (標準偏差; 7.97), HFPDD児女子で29.29点 (標準偏差; 10.90), 定型発達児男子で21.38点 (標準偏差; 4.36), 定型発達児女子で20.52点 (標準偏差; 5.14) であった。二要因分散分析の結果、性別の主効果は有意でなかった ( $F_{(1,162)} = 1.82, n.s.$ ) が、障害の有無の主効果が1%水準で有意であった ( $F_{(1,162)} = 49.98, p < .01$ )。HFPDD児の抑うつ傾向が、定型発達児より有意に高かった。なお、交互作用 ( $F_{(1,162)} = 0.53, n.s.$ ) については、有意ではなかった。

2. 自尊感情と自己評価の関連性, 自尊感情と抑うつ傾向の関連性

各自己評価領域が自尊感情に影響を与えているかを検討するため、HFPDD児群と定型発達児群それぞれにおいて、自尊感情得点を平均値によって低群と高群に分け、各自己評価領域の得点についてt検定を行った。その結果をTable 1, 2に示す。

また、HFPDD児群と定型発達児群それぞれにおいて、自尊感情得点を平均値によって低群と高群に分け、抑うつ傾向得点についてt検定を行った。その結果をTable 3に示す。

Table 1 HFPDD児の自尊感情得点低群と高群における各自己評価得点のt検定

自己評価領域	低群		高群		t 値
	Mean	S. D.	Mean	S. D.	
学業	2.575	0.803	2.983	0.478	1.4313
容貌	2.188	0.417	2.750	0.282	3.6134 **
対人関係 (友人)	2.688	0.753	3.292	0.838	1.6419
運動	1.906	0.626	2.625	0.808	2.1202 *
行動・自己表現	2.500	0.463	2.917	0.504	1.8695
対人関係 (教師)	2.625	0.694	3.417	0.702	2.4818 *
対人関係 (家族)	2.781	0.633	3.688	0.545	3.4190 **

Table 2 定型発達児の自尊感情得点低群と高群における各自己評価得点のt検定

自己評価領域	低群		高群		t 値
	Mean	S. D.	Mean	S. D.	
学業	2.737	0.616	3.157	0.416	4.9157 **
容貌	2.159	0.596	2.759	0.508	6.5577 **
対人関係 (友人)	3.075	0.688	3.593	0.433	5.5658 **
運動	2.690	0.777	3.123	0.626	3.7265 **
行動・自己表現	2.385	0.582	2.952	0.466	6.5370 **
対人関係 (教師)	2.984	0.713	3.470	0.514	4.7846 **
対人関係 (家族)	3.570	0.438	3.873	0.274	5.1244 **

\*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01

Table 3 両群の自尊感情得点低群と高群における抑うつ傾向得点のt検定

Group	低群		高群		t 値
	Mean	S. D.	Mean	S. D.	
HFPDD 児群	31.250	7.285	31.083	10.967	0.0376
定型発達児群	23.794	5.404	18.747	2.823	7.3013 **

\*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01

### 3. 自尊感情と個人が重視する自己評価領域の関連性

HFPDD児群と定型発達児群それぞれにおいて、自尊感情の低群と高群で、「個人が重視する自己評価領域得点」についてt検定を行った。その結果をTable 4に示す。

Table 4 両群の自尊感情得点低群と高群における「個人が重視する自己評価領域得点」のt検定

Group	低群		高群		t 値
	Mean	S. D.	Mean	S. D.	
HFPDD 児群	16.106	4.144	20.554	2.587	2.9696 **
定型発達児群	19.183	2.879	21.332	1.807	5.5194 **

\*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01

## IV. 考察

### 1. HFPDD児と定型発達児における自尊感情と自己評価、抑うつ傾向の高低の比較

自尊感情については、HFPDD児と定型発達児において、違いは認められないことが明らかとなった。これは、11~15歳のアスペルガー症候群の青年を対象として定型発達児と比較検討した結果、全体的自己価値観 (global self-worth) に違いはなかったという先行研究 (Williamson, Carig, &



Slinger, 2008) と一致する。しかし、9歳～16歳の高機能自閉症児を対象とした先行研究 (Capps, Sigman, & Yirmiya, 1995) では、定型発達児に比べて、全体的な自己評価が低かったことも示されており、本研究結果とは異なる。こうした矛盾した結果が導かれる理由としては、対象児の実態や使用された自尊感情尺度の違いなども影響しているかもしれないが、HFPDD児の自尊感情については、今後さらなる検証が必要になると言えよう。

次に、自己評価では「学業」、「容貌」、「対人関係 (教師)」、「行動・自己表現」の4領域について、HFPDD児と定型発達児とで自己評価得点に有意差はみられなかった。また、女子については、「対人関係 (友人)」と「対人関係 (家族)」においても、HFPDD児と定型発達児とで自己評価得点に有意差はなかった。HFPDD児においては、通常学級における失敗経験やそれによる周囲からの叱責の積み重なりにより、低い自己評価をしていることが予測されたが、それは「運動」領域と、男子における「対人関係 (友人)」と「対人関係 (家族)」の領域以外では、支持されないという結果となった。

また、HFPDD児群では、「対人関係 (友人)」と「対人関係 (家族)」において、女子の自己評価が男子の自己評価よりも有意に高かった。自尊感情及び自己評価得点の性差の要因については、本研究の結果からは十分に明らかにすることはできなかったが、このことはHFPDDの男子と女子とで支援の在り方が異なってくる可能性を示唆している。HFPDD児の自尊感情及び自己評価の性差については、今後も詳細な検討を続けていく必要がある。

一方、抑うつ傾向に関しては、HFPDD児の抑うつ得点が定型発達児より有意に高いことが明らかとなった。したがって、HFPDD児は定型発達児に比べて精神的健康度が低いと推察される。

## 2. 自尊感情と自己評価の関連性、自尊感情と抑うつ傾向の関連性

HFPDD児と定型発達児の自己評価領域の自尊感情への影響について検討したところ、定型発達児では全ての自己評価領域が自尊感情に影響を与えていた。それに対しHFPDD児は、「学業」、「対人関係【友人】」、「行動・自己表現」等複数の自己評価領域が自尊感情に影響を与えていなかった。HFPDD児においては、特定の自己評価領域しか自尊感情に影響しないという可能性がある。また、HFPDD児においては、自尊感情に影響を及ぼすその他の領域が存在しているという可能性もある。今後は、自由記述により、児童一人ひとりについて自分にとって何が大切な領域かを聴取した上で、各自己評価領域が及ぼす自尊感情への影響を検討することが重要だと考えられる。

次に、自尊感情と抑うつ傾向との関連について検討する。定型発達児については、自尊感情得点が高い群は抑うつ傾向が低くなっており、自尊感情と抑うつに関連性がみられた。一方で、HFPDD児については、自尊感情と抑うつ傾向に関連性がみられなかった。本研究は、定型発達児については、小学3年生から6年生までの児童を対象の検討した杉村 (2005) の報告にほぼ一致する結果が得られたと言える。しかし、HFPDD児については、杉村 (2005) の知見とは異なる結果となった。したがって、自尊感情と抑うつとの関係性については、HFPDD児と定型発達児では異なる心理学的なメカニズムであると推測される。

## 3. 自尊感情と個人が重視する自己評価領域の関連性

児童一人ひとりについて、自分にとって重要な領域として選択した3領域それぞれの平均得点を抽出し、重視する領域第一位にはその領域の平均得点を3倍、第二位の領域の平均得点を2倍、第三位の領域の平均得点を1倍する処理 (重み付け) をして、それらの合計得点 (「個人が重視する自己評価領域得点」とする) を自尊感情得点の高群と低群で比較した。その結果、定型発達児群においては1%水準で有意差がみられ、HFPDD児群においても1%水準で有意差がみられた。この結果より、HFPDD児と定型発達児ともに個人が重視する領域の自己評価は、自尊感情に強く影響していると言える。定型発達児では、先に述べたように全ての自己評価領域が自尊感情に影響を与えていたため、

この結果は当然の結果とも言える。しかし、HFPDD児群では、「学業」、「対人関係（友人）」、「行動・自己表現」等複数の領域が自尊感情に影響を与えていないという結果であったにもかかわらず、個人が重視する自己評価領域は自尊感情に影響を与えることが明らかとなった。したがって、HFPDD児にとっては重み付けがより重要な意味をもっており、自分にとって重要だと感じている自己評価領域が自尊感情を大きく左右すると推察される。

本研究の結果より、HFPDD児の自尊感情を高めるための支援においては、それぞれ自分にとって大切な自己評価領域（友人関係や学業など）で自信をつけさせることが大切だと言えよう。また、HFPDD児においては、重み付けを行った「個人が重視する自己評価領域得点」が自尊感情に影響を与えていたため、どの自己評価領域をどの程度重視しているのかということに関して個人差が大きいことが推測される。一人ひとり自分にとって重要な領域が異なっていて、第一番目に重視している自己評価領域がその子の自尊感情を支える、場合によっては傷つけてしまうなど、大きな影響力をもつ可能性があると言える。

しかし、本分析では意図的に、重視する領域第一位にはその領域の平均得点を3倍し、第二位の領域の平均得点を2倍、第三位の領域の平均得点を1倍する処理を行った。ところが、ある児童にとっては、自分にとっての重要度が、A領域は自分にとって80%の比率、B領域では15%の比率、C領域では5%の比率というような可能性も考えられる。さらには、本研究では自己評価領域として、7領域（学業、容貌、対人関係（友人）、運動、行動・自己表現、対人関係（教師）、対人関係（家族））を想定して調査を行ったが、その他の自己評価領域を重視する児童も存在すると考えられる。その課題に対処するためには、たとえば自由記述により児童一人ひとりについて自分にとって何が大切なことなのかを聴取した上で、自己評価の様相を検討することが重要だと考えられる。今後は、何をどれくらい自分にとって大切だと感じているか、児童それぞれの違いを十分に考慮して自尊感情及び自己評価を検討することが必要であろう。

## V. 文献

- Capps, L., Sigman, M., & Yirmiya N. (1995) Self-competence and emotional understanding in high-functioning children with autism. *Development and Psychopathology*, 7, 137-149.
- Harter, S. (1985) Manual for the Self-Perception Profile for Children. Unpublished manuscript, University of denver.
- 小島道生・納富恵子 (2009) 高機能自閉症・アスペルガー症候群のある子どもの自尊感情と支援：保護者に対するアンケート調査からの検討. 日本LD学会第18回大会発表論文集, 393.
- 村田豊久・堤 龍喜・皿田洋子・中庭洋一・井上登生・吉永一彦 (1991) 児童思春期における自己認識の発達と抑うつ傾向との関連について. 厚生省児童・思春期精神障害の成因及び治療に関する研究.
- Pelham, B. W. (1995) Self-investment and self-esteem: Evidence for a Jamesian model of self-worth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1141-1150.
- 桜井茂男 (1995) 「無気力」の教育社会心理学：無気力が発生するメカニズムを探る. 風間書房.
- 杉村裕美 (2005) 子どもの心の健康：複数の尺度を用いて客観的に読み取る. 教育実践研究, 13, 201-206.
- Williamson, S., Craig, J., & Slinger, R. (2008) Exploring the relationship between measures of self-esteem and psychological adjustment among adolescents with Asperger syndrome, *Autism*, 12(4), 391-402.

